

令和 3 年 6 月 21 日現在

機関番号：62618

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2020

課題番号：19K23064

研究課題名(和文)古代語複合動詞の敬語の研究

研究課題名(英文)A Study on Honorific Forms of Compound Verbs in Ancient Japanese

研究代表者

呉 寧真 (WU, NINGCHEN)

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・言語変化研究領域・プロジェクト非常勤研究員

研究者番号：10846380

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、複合動詞の敬語形について、客体敬語に着目し、通時的な研究を行うものである。複合動詞の客体敬語形を調査し、異なる形を分類し、その形をとる理由を分析する。そして、全体的にどのような偏りがあり、どのような体系になるのかを明らかにし、敬語の視点から、古代語の複合動詞の構造の一部を明らかにすることを目的とする。この目的を達成するために、国立国語研究所の「日本語歴史コーパス」(CHJ)を利用し、客体敬語の形になる複合動詞を検索した。その結果、2段階の敬意の使い分けが見られないが、体系があることが分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、これまでの研究ではふれることが少ない客体敬語に着目している。また、国立国語研究所の「日本語歴史コーパス」(CHJ)を利用し、客体敬語の敬語独立動詞を持つ動詞を検索した。コーパスを使用することで、各時代から用例収集できた。すなわち、本研究は従来特定の時代や特定の作品に集中する研究と異なり、共時的にある時代の敬語構造を究明でき、また、通時的に変遷を観察することができた。さらに、CHJを使用することから、本研究は研究データのアーカイブを公開し、すべての研究者と資料を共有できる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this paper is to clarify the subject honorific form of compound verbs, especially a diachronic study of the humble word.

Investigate the object honorifics of compound verbs, classify different forms, and analyze the reasons why this form is used. The purpose of this research is to clarify what kind of tendencies the whole will have, what kind of system it presents, and to clarify part of the structure of compound verbs in ancient Japanese from the perspective of honorifics. In order to achieve this goal, use CHJ (The Corpus of Historical Japanese) of NINJAL (National Institute for Japanese Language and Linguistics) retrieve the object honorific of compound verb. As a result, it can be found that although there is no difference in respect between the two levels, there is a relatively mature system.

研究分野：日本語学

キーワード：複合動詞 客体敬語 謙譲語 通時的 日本語歴史コーパス

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

複合動詞の研究史では、古代語には複合動詞が存在するかどうかについて長く論じられていた。「動詞連用形+動詞」の形について、吉沢(1952)、金田一(1953)、百留(2001)などは、複合動詞は存在せず、この形は複数の動詞を接続する表現であると述べている。それに対して、関(1977)は、一部のものは真の複合動詞と認めざるを得ないと述べている。また、井上(1962)、徳本(2009)、阿部(2011)などは、上代からすでに複合動詞は存在したと述べていて、意見の分岐が甚だしい。近年では、青木(2013)が、現代語の複合動詞には語彙的複合動詞と統語的複合動詞があるが、古代語には語彙的複合動詞が存在せず、すべて統語的であり、そのため現代語の複合動詞の概念とは合致しない、ただし、古代語から現代語への繋がりがあり、「句」から「語」への変化であると主張している。

従来の古代語の複合動詞の研究は両極であり、存否に関する大きな問題を扱う論文と、特定の動詞が前項や後項になる場合についてなど、限定的な問題を扱う論文はかなりある。しかし、「体系」を扱う論文は少ない。また、敬語体系は動詞全体に大きな影響を及ぼすにもかかわらず、特定の動詞の敬語形に触れたものだけは見られる。総じて先行研究は少なく、体系を明らかにした研究はほとんどない。敬語体系を明らかにすることは、複合動詞の体系の一部を解明することであり、複合動詞の研究には必要である。

近年では、複合動詞に関する研究が盛んであり、特に影山太郎編(2013)『複合動詞研究の最先端 謎の解明に向けて』が出版されて以来、複合動詞に関する論文が増えつつある。また、国立国語研究所は『複合動詞レキシコン』(<https://db4.ninjal.ac.jp/vvlexicon/>)を構築し、現代語複合動詞の研究資料として使いやすい。同時に英語・中国語・韓国語にも翻訳しているため、外国人日本語学習者に対しても便利な学習資料になる。ただし、現代語の複合動詞の研究が見られる一方、古代語の複合動詞の研究は、青木(2013)以来ほとんど見かけない。本研究は複合動詞の分野で、関(1977)、青木(2013)を引継ぎ、その補足にもなる。

【参考文献】

青木博史(2013)「複合動詞の歴史的変化」影山太郎編『複合動詞研究の最先端 謎の解明に向けて』ひつじ書房/阿部裕(2011)「上代日本語の動詞接続「トリ-」について 複合動詞の存否を中心に」『Nagoya Linguistics』5/井上展子(1962)「動詞の接辞化 萬葉の「行く」と「来」」『萬葉』43/金田一春彦(1953)「国語アクセント史の研究が何に役立つか」『金田一博士古稀記念言語民俗論叢』三省堂/関一雄(1977)『国語複合動詞の研究』笠間書院/徳本文(2009)「上代の複合動詞 前項と後項の意味関係から」『立教大学日本文学』102/百留康晴(2001)「動詞接続から複合動詞へ 「入る」の補助動詞化を中心に」『文芸研究』152、日本文芸研究会/吉沢典男(1952)「複合動詞について」『日本文学論究』10、国学院大学国語国文学会

2. 研究の目的

複合動詞の研究史では、複合動詞の存否はよく論じられている。また、存在すると主張する先行研究も、古代語の複合動詞はどのように現代語の複合動詞につながるかということの説明しなければいけないが、究明されていない部分が残っている。

本研究は、複合動詞の敬語形について、客体敬語に着目し、通時的な研究を行う。複合動詞の客体敬語形を調査し、異なる形を分類し、その形をとる理由を分析する。そして、全体的にどのような偏りがあり、どのような体系になるのかを明らかにし、敬語の視点から、古代語の複合動詞の構造の一部を明らかにしようとしている。

複合動詞の敬語体系を明らかにすることから、古代語には複合動詞が存在したことを主張し、古代語複合動詞には「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」の分別がないことを検証する。また、変遷する形を観察することから、現代語とのつながりも究明したい。

3. 研究の方法

本研究は、これまでの研究ではふれることが少ない客体敬語に着目している。また、国立国語研究所の「日本語歴史コーパス」(CHJ)を利用し、客体敬語の敬語独立動詞を持つ動詞を検索した。コーパスを使用することで、短時間で大量の用例を集めることができ、また、各時代から用例収集できた。すなわち、本研究は従来特定の時代や特定の作品に集中する研究と異なり、共時的にある時代の敬語構造を究明でき、また、通時的に変遷を観察することができた。

CHJにおける具体的な調べ方については、「来」と「行く」に「まゐる」「まうづ」「まかづ」「言ふ」に「聞こゆ」「聞こえさす」「申す」、「思ふ」に「存ず」「聞く」に「うけたまはる」「仕ふ」に「仕うまつる」、以上の動詞と敬語補助動詞「きこゆ」「きこえさす」「たてまつる」「たてまつらす」が複合動詞に介在や後接する例を研究対象として扱い、資料はCHJの奈良時代から室町時代に渡って収集した。まず源氏物語などを中心として、中古和文資料の状況を明らかにした後、上代と中世の研究に向かって調べた。上代の場合、萬葉集と続日本紀宣命を加え、中世の場合、日本語歴史コーパス検索範囲を広げ、鎌倉・室町の範囲での調査を行い、個別の時代の使用状況と、通時的な変遷を観察した。

4. 研究成果

複合動詞が客体敬語形になる場合、どのような形になるのかについて、敬語独立動詞に変える形と敬語補助動詞をつける形を調査することを通し、以下の結論を得た。

敬語独立動詞を持つ動詞「来」「行く」「まゐる」「まうづ」「まかづ」、「言ふ」「申す」は敬語補助動詞を使わない傾向がみられる。

「来」「行く」「言ふ」を含む複合動詞は、客体敬語形になる場合、敬語補助動詞をほとんど用いず、敬語独立動詞を用いる傾向がある。この現象は、主体敬語においても観察できる。ただ、主体敬語の場合、敬語独立動詞を2種類有する動詞は、敬語独立動詞だけで2段階の敬意を表せる。そのため、敬語独立動詞を使う傾向が観察できた。しかし、客体敬語には敬意差が観察できず、2段階の敬意を表せる主体敬語形と異なり、1段階しかないと考えられる。従って、同じく敬語独立動詞を使用する傾向があっても、主体敬語と客体敬語との理由は異なるのである。

敬語独立動詞と敬語補助動詞との敬意差が確認できない。

結論 で述べたように、敬語独立動詞を有する動詞は、敬語補助動詞を使用しない。そのため、敬語独立動詞と敬語補助動詞との敬意差が確認できなかった。

の動詞以外、ほとんどの複合動詞は敬語補助動詞が後接する形（動詞+動詞+きこゆ/たてまつる）を用いる。また、最高敬語形と思われる「きこえさす」「たてまつらす」の例数が少なく、敬意差が確認できない。

敬語独立動詞を有さない動詞は、「きこえさす」と「きこゆ」「たてまつらす」と「たてまつる」で2段階の敬意を表せる予想だったが、敬語独立動詞を有する動詞と同じく、2段階の敬意が観察できなかった。1段階しかないと考えられる。つまり、敬語独立動詞を有するかどうかにかかわらず、客体敬語の形は2段階の敬意を表さないのである。

複合動詞も、単独の動詞の場合も同じく、客体敬語は客体がないと使われないため、主体敬語と比べると例数が少ない。また、「例えば、二人が相互に話しかける一連の対話の場合に、双方の「言ウ」動作を「言ふ」で表し、いずれに対しても客体敬語を用いないことがある」ことも指摘されている。つまり、二人が交互に主客になる場合、客体敬語は相殺的に使用しなくなる（大久保一男（1975）「客体敬語の用・不用-源氏物語地の文における「言ウ」動作の場合-」『国語研究』38）。必ず使用する主体敬語に対して、客体敬語は不使用も可能なら、主体敬語より段階が少ないことも考えられる。

また、敬語独立動詞には動作主体と客体との上下関係を規定する「関係規定性」が観察できるが、敬語補助動詞にはないことも指摘されている（大久保一男（1977）「客体敬語の用・不用」『國學院雑誌』78-11）。「来」「行く」「言ふ」が敬語補助動詞を用いない傾向は、関係規定性によるものだと考えられる。動作の客体は敬語の使用対象であるが、主体より身分が低い場合、客体敬語を使用しないことになり、主体より身分が高い場合、敬語独立動詞で規定することになる。そのため、敬語補助動詞を使用する必要がなくなるのである。

複合動詞の前項と後項との間に敬語補助動詞が介在する形（動詞+きこゆ/たてまつる+動詞）は少ない。

この形について、主体敬語はほとんど用いない。主体敬語より、客体敬語の方が、敬語補助動詞は複合動詞の前項と後項との間に介在しやすいとよく指摘されている。ただし、研究の結果によると例は多くない。また、「たてまつる」の場合、ほとんど「見たてまつり」の例であるように、偏りがある。従って、この形は一般的なものではない。

以上のように、複合動詞が客体敬語の形になる場合、異なる形を使用することが分かった。主体敬語の体系と異なるが、客体敬語にも独自の体系が観察できた。また、2段階の形が観察できないが、主体より身分が低い場合、客体敬語を使用せず、主体より身分が高い場合のみ使用することにより、敬意の差がある可能性もある。

さらに、CHJを使用することから、本研究はすべての研究データを、【表1】のように、コーパスのアノテーションを公開する予定である。それが実現するとすべての研究者と資料を共有できる。

【表 1】コーパスの位置情報を用いたアノテーションの例

サンプル ID	開始位置	連番	前項	後項	タイプ
20- 源 氏 1010_00001	700	410	思ひ	あがり+た まへる	動詞+動詞+敬語補助動詞
20- 源 氏 1010_00001	910	510	おとし め	そねみ+た まふ	動詞+動詞+敬語補助動詞
20- 源 氏 1010_00045	91880	52550	思しめ し	放つ	敬語独立動詞+動詞
20- 源 氏 1010_00001	7050	4120	思ほし	かしづき+ たまふ	敬語独立動詞+動詞+敬語補 助動詞

こうしたデータは ID と開始位置で CHJ とつながり、簡単に用例の検証や再利用が可能になる。従来の研究は、研究者個人が研究における使用データを、一回だけの利用で完結する。他の研究者が同じ資料を扱う場合、再調査しなければいけない。その手間はかなりの浪費になる。本研究は、アノテーションの公開によって、研究資料の再利用が可能になった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 呉寧真	4. 巻 84
2. 論文標題 動詞に前接する「まゐる」「まうづ」「まかづ」「まかる」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国語研究	6. 最初と最後の頁 43-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 呉寧真	4. 巻 -
2. 論文標題 中世語の複合動詞の敬語形	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国立国語研究所論集	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 呉寧真
2. 発表標題 中世語の複合動詞の敬語形
3. 学会等名 NINJALサロン
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 呉寧真
2. 発表標題 中古語複合動詞の客体敬語の形
3. 学会等名 「通時コーパス」シンポジウム2021オンライン
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------